

畿内から淡路島を越えて四国へ  
海の峠

# 南海道

国生み神話で有名な淡路島は、畿内から阿波の国へ渡る際に通る道という意味から古くは「阿波路」あるいは「粟道」などと書かれていました。

都から南下して紀伊の国まで行き、紀淡海峡を渡って淡路島へ。由良あるいは洲本への上陸後は、島の南部を現在の国道28号線とほぼ同じルートで横断し、鳴門海峡対岸の福良に至ります。紀伊の国と阿波の国を最短距離で結ぶこの道のルーツは、古代に制定された「南海道」という道にさかのぼります。

畿内と四国をつなぐ海の道。交通の要衝であった「南海道」は、いわばその道における「峠」のような存在であったと言ってよいでしょう。人々や物資が盛んに往来した南海道をしのびながら、淡路島南部に残るさまざまな歴史と文化の足跡を訪ねてみましょう。



大鳴門橋

## 淡路島で生まれた人形浄瑠璃が 阿波へと伝えられた道

明石海峡大橋の完成で、本州から四国に渡る東のルートが開通したと話題になったのは記憶に新しいところです。新しい大動脈が、淡路島の次代を創る道であるとするなら、「南海道」は古代から近代までの島の文化や産業の発展を支えてきた道。その姿は、今も島の南西端にある福良八幡神社裏の「切通し」付近に往時のまま見ることができます。

その「南海道」を通じて淡路島から全国へ伝わったもののひとつに淡路人形浄瑠璃があります。

淡路人形浄瑠璃は、昭和51年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。淡路島から四国へと渡る大鳴門橋記念館の中にも淡路人形浄瑠璃館が設営されていますが、その発祥の地は、南海道のほぼ中央に位置する三原郡三条村（現在の三原町市三条）あたり。古くから国府や国分寺が置かれた淡路の文化の中心地だったところでした。



市村六之丞江戸時代末の三番目

室町時代の末、摂津の国・西宮の戎神社に仕えていた百太夫という「くぐつ師（人形使い）」がこの地を訪れ



淡路人形の頭（かしら）

人形操りを伝えたのがその始まりで、現在でも三条八幡神社には百太夫を祀った社や、「淡路人形発祥地」の碑が建てられています。

有名社寺の神事芸能であった人形操りが、浄瑠璃と三味線に合わせて今のような人形芝居をするようになったのは江戸時代の初め頃であるとか。江戸中期になると、人形座の数も40座あまりになり、その多くが南海道を通って四国地方や九州、中部地方まで巡業してまわりました。

阿波人形浄瑠璃をはじめ、現在、日本各地に残る人形浄瑠璃はそのほとんどが淡路島から伝えられたものといわれます。大阪で文楽座を開いた植村文楽軒も淡路の出身といわれています。

## 国生み伝説と 淡路海人の関係

神話によれば、日本の国を創るよう命じられたイザナギとイザナミの二神は国生みの舞台として創ったおのころ島に続いて、淡路島を生んでいます。日本列島の他の大きな島に先立って……。いわば、日本の国の歴史がこの淡路島から始まったと神話は伝えているわけです。

国生み神話と淡路島の特別な関係。それは一体何を物語るのでしょうか。

その疑問を解く鍵のひとつと思われるのが、古来より淡路島およびその周辺に勢力を広げていたと伝えられる海人（あま）族の存在です。

もともと淡路島周辺は、漁業や航海、製塩など海にかかわる仕事をする海人の本拠地でした。彼らは、イザナギ・イザナミを祭祀する信仰を持っていましたが、大和政権の統一の過程で征服されたと考えられます。同時に、彼ら固有の信仰であったイザナギ・イザナミの物語も大和政権の成立を正当化する神話の一部として『記紀』に取り入れられてしまったのではないかと。

『日本書紀』にも「御原の海人」という呼び方



煙島を望む

で淡路南部で活躍していた海人のことが幾度となく登場するほか、「御食国（みけつくに）」として朝廷の食料を献上する淡路島のことが書かれています。ひとつの説ではありますが、この説に従えば国生み神話をはじめとする古代日本における淡路島の特別な存在も理解できるような気がします。

南淡町には今も阿万（あま）という地名があり、海人の住んだ場所と伝えられるほか、おのころ島伝説のある沼島や福良湾の煙島のように海人もしくは水軍の本拠地とされる場所も残っています。



敦盛塚

### 源平合戦の悲話を 今に伝える煙島

福良湾の西よりに土地の人々が煙島と呼ぶ小さな島があります。島内の巖島神社南側には平敦盛の首塚（敦盛塚ともいう）と伝えられる石籠（いじずし）が残されています。

敦盛は平清盛の弟経盛の末子、無官の大夫と呼ばれ、笛を愛した貴公子です。「平家物語」によれば、敦盛は寿永三年（1184年）、一ノ谷（現在の神戸市須磨区）の戦いに敗れ、義経の部下・熊谷次郎直実（くまがいじろうなおざね）に討たれて命を落としますが、1697年に著された『淡国通記』は福良の伝説として次のような話を載せています。

「直実は敦盛の首を義経に奉り、夜にまぎれて船に敦盛の死骸を乗せ、淡路の東浦の磯伝いに船を漕がせ、福良の浦に平家がいることを知って、船頭に命じて遺体を父経盛に届けさせた。経盛は悲しみつつ福良の僧に頼んで、煙島で無常の煙にしたという。煙島の名のおこりである」

その後の『淡路草』（1811年）は一説として、敦

### ●南淡町 八幡橋（通称 めがね橋）

橋柱なしのこのアーチ式の橋。総御影石造りの橋の欄干には松を象徴する10個の松型開孔部が並列し、アーチの側面に鶴と亀を雕刻してあるので鶴亀橋ともいう。

明治の始年出来た橋としては、造形的にも斬新で美しくスマートな橋で、淡路で唯一の明治の文化遺産である。

この橋は明治10年八幡村の豪商印部善与門によって造立寄贈されたもの。当時重要官道に架かっていた八幡橋が、出水の度に破損、交通の途絶する事を憂い、私財を投じて播磨の家島と小豆島から石を運び、津名郡垂井村 井高政吉を石匠として、明治10年9月1日着工、工事日数137日、工数延べ1326人を要し明治11年1月17日落成した諸経費のうち、印部善与門の負担は619円40銭5厘（当時の標準米価1石4円80銭）



八幡橋（めがね橋）



切通し

であったという。

現在、八幡橋は竣工後93年の昭和45年、山路川の改修で八幡神社南に移転され保存されている。

### ●南海道の宿駅

馬宿（むまいど）南海道の宿駅として福良に馬宿が置かれたのは、大化2年（616）とも天武天皇大宝年中（701～703）ともいわれる。

福良備前町を渡海場とするために、福良八幡神社の裏手北側に人力で造られた新道「切通し」。馬宿からこの切通しを通過して福良の町へ入った。

往時、商人や旅人で賑わったであろうこの道は、今はもう町の人さえほとんど通りません。しかし表通りの騒音からほんの少し外れた所に、木もれ日と遮る木々が交錯しながら、しっかりと痕跡を残しています。この道を舞台にした、当時の人々の面影が偲ばれるたたずまいです。

盛の首を煙島で煙にしたとも書き残しており、これが首塚の由来となったものと思われます。

もっとも、島の歴史はさらに古く、煙島という呼称についても「要害の所として、または漁業の合図として烽火（のろし）をあげた狼煙島であった」という説もあります。\*

明石海峡大橋を経由すれば2時間余り。神戸淡路鳴門自動車道路の完成で、今や四国は大阪からの日帰り圏となった感があります。人やモノ、文化の往来にも変化が現われるのは確実でしょう。

一本の道と言ってしまうとそれまでですが、社会資本（インフラ）としての道路整備が周辺におよぼす効果には計り知れないものがあります。阪神間から陸続きとなった今、かつての「海の峠」はリゾート客でにぎわう道としてその趣きを変えつつあるようです。

\*『第3回ふるさと探検隊 煙島』（南淡町地域教育 活性化センター編）参照

※取材協力 三原町郷土人形浄瑠璃資料館長 素川 恒男氏  
南淡町教育委員会 藤平 明氏